コラム

中野静夫・中野聰恭 著

ボロのはなし　ボロとくらしの物語百年史

［評者］環境カウンセラー　岩地（いわじ）　加世（かよ）

四六判　174 頁
定価￥1,200 円＋税
1987 年発行
［発行所］
リサイクル文化社
〒179-0081
東京都練馬区北町
3-17-1-107
TEL 03-3931-2571
FAX 03-3931-2571

衣類のリサイクルに関心を持ったとき、まずはじめに読んでおくとよいと紹介されて、この本と出会った。

本書は、現在、故繊維業者の代表的存在である中野聰恭氏と、1908（明治41）年生まれで60年以上故繊維再生業に関わってこられた先代の中野静夫氏の共著であり、静夫氏の実体験をもとに書かれた、目線を変えた近代日本史でもある。明治以降の近代日本において、実際に、襤褸＝ボロ（着古された衣類）がどのように扱われていたのかについて知る機会は少ない。本書では、主題のボロを中心に、その他のくず（今は資源物と呼ばれる）や食料の事情などについても詳しく述べられていることから、ページをめくるにつれ、当時の社会状況や庶民の暮らしがまざまざと目に浮かんでくる。ごみを見ればその家のことがすべてわかるといわれるが、近代日本では、くず屋さんの状況が当時の世相を映す鏡であったといえる。

興味深い話題としては、洗濯好きな日本人の古着で作ったウエス（工場で使われる油ふき布）は、品質が高く、海外から注目される“輸出商品の花形”だったという話。何度も洗った木綿は、油分が抜けて吸湿性がよく、ウエスに最適なのだそうだ。この洗濯好きという国民性は、現代において、各家庭に収納しきれないほどある“タンスの肥やし”が清潔な状態で保管されている大きな理由でもあるはずだから、資源をとことん活かすという価値観と合わされば、“タンスの肥やし”（ごみ予備軍？）も貴重な資源として再度生かされる可能性があると考えさせられた。

また、「古繊維業界の現状と将来」の章にある、衣料品原料の多様化とリサイクルの困難性の関係や、円高が衣類リサイクル循環に与える影響といった課題は、今日の課題と重なるものであり、本書の発行された1987（昭和62）年の情勢から、いまだ、ほとんど変わっていないということに気がつく。衣類のリサイクルについては、制度的にも技術的にも手付かずのままということだろう。

前書きで述べられた静夫氏の「どんな世の中でも、物を粗末にしてはいけません」の言葉は胸に深く響く。現在、聰恭氏は、“エコソフィー”（環境に配慮する知恵）を提唱されている。特別にエコロジーを意識しなくても、人間が行なう通常の活動（エコノミー）の中で自然とエコロジーが成り立つ。エコノミーを犠牲にすることなくエコロジーが当たり前に調和する社会こそ、真に豊かな社会であり、これを実現するためには、一人ひとりの知恵（ソフィー）が必要であると。やはり私達一人ひとりがカギを握っているのだ。

実はこの本は既に絶版になっているが、図書館にあることも多いので、是非、一読をお奨めしたい良書である。加えて、本誌62～66頁の「古着の行方をたどる旅」とナカノ（株）のHPで、現代の衣料品リサイクルの最前線に触れられることをお奨めする。